３．飛騨高山匠の技デジタルアーカイブ資料集（下）

３-１　金森時代-1　高山城の搦手道　（719 点）

高山城跡は高山市街地にある都市公園となっていて、通称城山、別名を臥牛山、邑山ともいった。

金森氏入国以前は、「天神山城」と呼称され、飛騨の守護代であった多賀出雲守徳言によって、文安年中に築城され、近江の多賀天神を祀ったことから多賀天神山、城は多賀山城と呼ばれた。

安川通りあたりに「安川村」があってそこが城下であった。永正年間には高山外記が在城、「高山」の地名は「多賀山」あるいは高山外記の「高山」から名づけられたという。

３-２　金森時代-2　高山城の大手道　（438 点）

高山城は、織田信長が築城した安土城の直後に構築され、軍事的機能を最優先させた形の城とは異なっている。

御殿風の古い城郭形式を持ち、外観 2 層、内部 3 階の構造を持つ天守を備えているのが特徴である。

一番高い所に本丸屋形、中腹の二之丸は東と西に平地を持ち、西側に藩主の屋形、東側は庭樹院（金森氏第 6 代頼旨の母）が住んだ屋形であった。

３-３　金森時代-3　金森氏の転封先・上山城と武家屋敷　（286 点）

飛騨国主第 6 代金森頼旨は元禄 2 年（1689）4 月、江戸幕府第 5 代将軍徳川綱吉の奥詰衆（将軍のそばに仕える重要な役）に、同年 5 月には「側用人」（将軍と老中を取り次ぐ重役）に任じられ、出世した。

しかし、翌 3 年 4 月、綱吉の考えに合わず免職、翌 4 年 6 月には、なぜか江戸での屋敷替えを命じられた。

そして元禄 5 年（1692）7 月 28 日、出羽上山への転封（国替え）を命じられ、高山城下町は上を下への大騒ぎになった。これにより金森氏 6 代による飛騨国の統治は終わった。

３-４　金森時代-4　近江商人の町・近江八幡　（323 点）

天正 13 年（1585）、豊臣秀次は八幡山山頂に近江八幡城を築いた。

そして本能寺の変で主を失った安土の城下町をここに移している。

縦 12 通り、横 4 筋の整然とした町を整備した。

10 年後に城は廃城となったが城下町はそのまま栄えた。近江商人の町である。

高山城下町の中の商人町は近江八幡の商家とよく似ており、高山の商人町の建築は近江商人との関係が考えられる。

3-5　天領時代-1　下呂・武川久兵衛墓地、温泉寺　（211 点）

元禄 9 年(1696)武川久兵衛四代倍行は弟藤助を伴って、下呂湯之島を発ち江戸へ向かった。

4 年間江戸に滞在し木材商 栖原角兵衛と知り合い、木材の消費流通、資金調達等綿密な調査研究を行ない、元禄 13 年（1700）、奥羽下北半島の南部大畑に木材商飛騨屋を開業した。倍行 27 歳の時である。

飛騨屋第四代益郷の時、90 年にわたる事業を断念する結果となった。

3-6　天領時代-2　三町用水、神明用水　（196 点）

高山城下町をつくるとき、国主となった金森長近は南北に長い通りの商人町を 3 本つくった。

長近は城下町全体の都市計画をする中で、商人町は東側から一、二、三番町の順に整備を進め、三番町は最後の方になっている。

上三之町（三番町）の道路幅は 430 年前の道路幅がそのまま現在に至っていると思われる。

3-7　天領時代-3　五ケ村用水取り入れ口　（93 点）

五ヶ村耕地用水路は、五ケ村用水堰堤の左岸側から取り入れられ、大野郡花里村、西之一色村、上岡本村、下岡本村、七日町村の五ヶ村の農業用水であった。

明治 6 年には森佐兵衛らがこの用水を使って織る洋式製糸場を花里村に建て、80 人が雇われている。

また五ケ村用水堰堤の右岸側から取水される神明用水の方では、明治 21 年、永田吉右衛門が水力による三星織工場を開業した。

3-8　天領時代-4　江名子川に架かる橋・下流からその 1　（778 点）

金森氏は高山城下町をつくる際、東側の防御として自然の河川の江名子川を掘とした。

空町と呼称される武家屋敷の場所の東側を流れていて、北流する。

金森氏は現在の左京町辺りで西方向に河川を切り替えている。その位置の方が北方向の防御ラインとして完全であった。

3-9　天領時代-5　江名子川に架かる橋・下流からその２　（289 点）

金森氏は高山城下町をつくる際、東側の防御として自然の河川の江名子川を掘とした。

空町と呼称される武家屋敷の場所東側を流れていて、北流する。

江名子川は、神通川水系の１級河川で、豪雨時の水量が近年多くなり、河床の掘り下げ工事が行われ、深い川になっている。

川沿いに色彩舗装がなされて歩きやすい雰囲気になっていて、春の桜がきれいである。

3-１０　飛騨の里-1　バッタリ小屋、水車小屋　（93 点）

水を利用し、天秤のように動く唐臼を、飛騨地方では「ばったり」という。

杵が上げ下がりするときに出る「バッタバッタ」という音から名づけられたという。米や稗をゆっくりと精白する臼で、少しの水でも動く。

このバッタリは高山市荘川町三尾河にあったもので、臼を二つ使って能率を上げるようにしている。

ゆっくりと米や稗をつくバッタリの音は、山間ののどかな風情を感じさせてくれる。

3-１１　飛騨の里-2　飛騨の里・匠神社　（185 点）

飛騨の里構内の山側に、飛騨匠を祀った匠神社がある。石段や狛犬、本殿、それを覆う「覆殿」の建物で構成されている。

本殿は飛騨市河合町保にあった「鈿女神社」の建物で、下小鳥ダム建設により昭和 44 年に移転された。鈿女は天の岩屋戸の神話に出てくるアメノウズメノミコトで、芸能の神様と言われる。

また、覆殿は同市宮川町加賀沢の白山神社拝殿を、狛犬は丹生川から、石段は鈿女神社から移されていて、各地の神社の貴重なものが再び息を吹き返している。

3-１２　飛騨の里-3　飛騨の里・道上家　（124 点）

この家は、越中の国境いにあって、宮川渓谷と越中西街道を隔てて富山県婦負郡細入村の西加賀沢集落と相対している。

内部は平入りで、三室広間型を基本としている。「ドジ」に入ると右に「マヤ」、奥に「ニワ」がある。「ニワ」は屋内農作業の場で、板敷床になっている。「オエ」は、三間×四間半と広い。「オエ」の左横には仏壇のある「デイ」、エンのある「オクデイ」がある。中２階は養蚕と一部が居室になるが、人が頭を低くして歩ける程の高さである。

3-13　飛騨の里-4　飛騨の里・大野家　（39 点）

妻入りの民家は、飛騨では高根町の野麦、日和田、猪之鼻などの集落に点在するだけである。

入口の土間から家の中央を、裏まで抜けた大きな部屋は「いのま」と言われた。その両側には「ねま」、「ものおき」、「しけものびや（漬物部屋）」がある。

このような間取りは飛騨の一般的な農家にはないものである。

江戸時代、南方山と言って幕府の御用材を伐採した杣人の小屋から住居に進展していったものであろうと考えられている。

3-14　飛騨の里-5　飛騨の里・景色　（107 点）

飛騨は、谷筋が違うと雪の質、量も違い、また太平洋側と日本海側では雪の量が全然違う。そのため同じ飛騨の中でも、建物や冬のソリなどの民具の形が違っていて、全国的にみて大変珍しい風土である。

昭和 34 年、白川村の御母衣ダム建設に伴い、古い合掌造り建物の若山家が高山に移された。貴重な建物である若山家を高山へ移して「飛騨民俗館」として出発、管理人には長倉三朗を委嘱した。

3-15　飛騨の里-6　飛騨の里・行事　（117 点）

飛騨の里は野外博物館として季節によっていろんな伝統行事が行われている。入館者は花もち、しめ縄づくり、わらじ作り、サルボホ作りなど制作を楽しんでいる。雛様、端午の節句、巨大こいのぼりの展示、車田の田植えなど動きのある博物館になっている。

また各民家では常時煙が出ていて、建物保存に一役買っている。

3-16　史跡-1　荏名神社神橋とその周辺　（163 点）

荏名神社は江名子川と塩谷川の合流地点に鎮座する。大きな岩が存在する神域は、古来稲置の森と言われて小さな祠があった。文化 12 年（1815）飛騨が生んだ国学者田中大秀は延喜（905～）の昔に定められた飛騨八社の一社であったことを考証し、神域を整備し社殿を改築して境内の一隅に千種園と称する邸宅を立て、祭祀を怠らず著作と後進の指導に努めた。

荏名神社神橋は大秀の設計による橋で、石造の橋台と梁が残っている。

3-17　史跡-2　荏野文庫と田中大秀墓　（106 点）

荏野文庫土蔵は国学者田中大秀の文庫蔵で、荏名神社の境内にあり、弘化 2 年（1845）、火災と鼠害に備え池の中に建てられている。天保 15 年（1844）6 月 29 日釿始。京都神楽が岡の土を運び、飛騨国内各社の注連縄を集めて苅に使ったと伝えられる。上階の前面に明り窓をつけ、窓の上に大秀自ら「荏野文庫　弘化乙巳秋」としたためた木額が掲げてあった。

階下の正面に大秀の木像を安置する。木像は高さ 45cm、膝幅 36cm の坐像で左の背銘がある。

3-18　史跡-3　長倉集落、棚田、桂峯寺　（172 点）

長倉地区は上宝町にあって、南向きの日当たりのよい集落である。かなり急な道路が建物の間を縫うように通っていて、最頂部に棚田があり、焼岳が正面に見られる。そこから少し下ったところに桂峯寺がある。寺からは長倉集落が見下ろせ、眺望がよい。

桂峯寺は釈迦如来を本尊とする臨済宗妙心寺派（龍泉派）の寺院で、山号は仁月山。飛騨三十三観音霊場 28 番札所である。

3-19　史跡-4　杖石（長倉）　（115 点）

高さ約 70m、下部の周囲は 250m の岩壁の丘である。歩道が整備されていて、鎖を頼りに登ることができる。

昔、弘法大師がこの地を訪れた時、自分の持っていた杖を道行く人に差し上げようといって地面に立てたままでその場を立ち去った。

それがある日みるみる大きくなって今見るような岩になったと伝えられている。

上宝地区内吉野の笠石、岩井戸の蓑石とともに、この杖石は高原の三奇跡と言われ、弘法様にちなんで崇敬を集めている。

3-20　史跡-5　岩船の滝　（123 点）

この滝の名前は、滝が落ちる岩盤のくぼみが船に似ていることに由来する。落差 20m で、昔は不動滝、白糸の滝と呼ばれ、この滝に打たれて祈ると目の病気や頭痛が治ると伝えられている。

大きな岩盤に圧倒され、量の少ない滝の落ちる水音に癒される。滝の壁となっている岩石の基盤は、昔浅い海であった飛騨外縁帯の森部層という地層で、その上に丹生川町と上宝町の境にあった大雨見火山の宮川谷層と言われる溶岩が堆積している。

3-21　史跡-6　嘉念坊義俊、雪の白川村　（174 点）

■鳩谷の嘉念坊善俊上人（白川村）

嘉念坊善俊は奥深い山地に浄土真宗の教えを布教しようと、宝治年間（1247～49）、鳩谷の地に入った。

善俊は鳩谷に嘉念坊道場を建てて布教したが、弘安 5 年（1282）3 月 3 日に白川村鳩ケ谷の地で亡くなった。毎年 4 月 3、4 日の 2 日間、御忌法要が鳩谷法蓮寺で行なわれている。

3-22　史跡-7　寺と神社の桜（高山地域）　（117 点）

高山の桜の開花は遅い。雪が 3 月まで残り、4 月上旬にも雪がぱらつくこともある。

梅も桃も同時期に開花する。

3-23　史跡-8　上木甚兵衛が流された新島　（438 点）

■甚兵衛流罪の年譜

江戸永代橋（通常、帆船で 10 日）→ 品川沖
→ 浦賀（神奈川）　→ 伊豆下田 → 新島
→ 前浜に上陸 → 島役人の改め
→ 7 日間の寺入り（長栄寺の下寺東要坊）
→ 年寄又右衛門の組下彦三郎組へ預け
→ 名主青沼元右衛門の隠居所預け
→ 2 間 9 尺の小屋

当時新島には 360 戸、1800 人の島民が居住。

3-24　史跡-9　石工高原忠次郎　（101 点）

石工高原忠次郎は、日枝神社の狛犬や玄興寺の親鸞聖人像の石像など多くの作品を残している職人である。忠次郎は明治 25 年生まれで吹屋町に住み、石工職人を使って石工の請負業をしていた。29 件の作品がわかっている。高忠と刻んである石像は狛犬が 9 対、石像等が 7 体、灯篭が 7 対、石碑等が 3 か所、その他 3 か所、合計 29 件となっている。

日枝神社の北側入り口に設置されている狛犬は、台座も含めて高さ 3m 余りで、その表情には力強さと独自性がある。重々しさ、優れたデザインに感銘を受ける。

3-25　史跡-10　吉野朝時代の伝説地　（107 点）

高山市滝町集落の中程に小さな丘があり、その頂上に古い 4 基の五輪塔が残っている。ここには昔、遍照寺という寺があり、その寺は滝町に住みついていた和田氏の菩提所であった。五輪塔は和田氏累代の墓と伝わっている。

そばには「大楠公師瀧覚御坊遺跡地」と刻まれた石柱があり、京都・真言宗総本山東寺の管長であった松永昇道（丹生川町町方出身）が書を書いている。

3-26　行事-1　二十四日市　（312 点）

高山では、野菜を中心にした朝市のほかにも市がある。旧暦を使っていた江戸時代から明治時代の初期までは、「歳の市」として、上二之町で 12 月 24 日に開かれていた。田中大秀は『飛騨年中行事記』に、二十四日市では、「こぶ・みかん・はごいた・たつくり・数の子など正月用品が売られていた」と記している。明治 5 年（1872）に新暦に切り替えられても、正月を今まで通りの日に行なう家があり、新暦の 2 月 1 日（旧暦では正月にあたる）に正月行事を行なった。

3-27　行事-2　丹生川のくだがい神事　（104 点）

管粥神事は高山市丹生川町旗鉾にある伊太祁曽神社で 600 年前から続く伝統神事で、高山市無形文化財に指定されている。神事後には、参拝者にもお粥が配られ、これを食べると一年間無病息災で過ごせると言われる。約 6cm の麻ガラ（麻の茎）に、農作物の作況・気象・社会景気・プロ野球ペナントレースなど約 140 項目の占い事を記した木札をつけ、粥の材料となる米・大豆・小豆等と一緒に大釜で煮立てる。釜揚げし神前にお供えしたあと、麻ガラを一つずつ切り開き、粥の入り具合で一年の吉凶を占う。

3-28　行事-3　飛騨の塩ぶり市　（201 点）

公設市場で毎年 12 月 24 日（土日祭日の関係でずれることもある）に、飛騨の塩ぶり市が行われる。氷見や青森、北海道でとれて塩漬けにされた塩ブリの競り売りが行われ、年末の高山の風物詩になっている。

競りは 1kg あたりの単価で競られる。例えば 1 万貫は現在の 1,000 円（1kg の単価）、3 万貫は 3,000 円(1kgの単価)で、10kg のぶりを 3 万貫で落札すると 3 万円の買値になる。ぶりの重さは、塩漬けする前の重さで、骨を含めた 3 枚セットになっている。

3-29　自然-1　十二ヶ岳からの山岳眺望　（665 点）

高山市丹生川町にある十二ケ岳は 360 度の山岳景観が楽しめ、農耕祈願の神社がまつられている登りやすい山である。

頂上から一旦下った東側に展望台地があり、乗鞍岳や穂高連峰の大展望が楽しめる。北方には北ノ俣岳、黒部五郎岳、さらに遠く奥大日岳。西方には白木峰、金剛堂山、加えて人形山、三ヶ辻山。西南方向には船山、位山、川上岳、その遠くに白山連峰。加えて南方には小秀山、白草山、六郎洞山、御前山、そしてその左には乗鞍岳を展望する。

3-30　自然-2　五色ヶ原・ゴスワラコース　（318 点）

ゴスワラコースの出発地点は岩魚見小屋。シラビソコースの中間地点近くにあたる場所で、案内センターからは車で約 45 分移動した深い山の中である。

このコースの大部分は約 9000 年前の乗鞍岳最後の大規模な火山活動の際に権現池の火口から流れた溶岩流が埋めた大地の上に広がる森を通る。シラビソコースがある同じ谷をより乗鞍岳に近づいた場所になるが、受ける印象はより荒々しく、連なる溶岩の岩塊は巨大で高さ 10m を超えるような巨岩がそこかしこに見られる。

3-31　自然-3　五色ヶ原・シラビソコース　（285 点）

コースは出合い小屋を起点に比較的なだらかな谷間を前半は登り後半は下って時計回りに一周して出合い小屋に戻る。一番標高が低い布引滝が 1360m、最高地点のシラベ沢口が 1640m で高低差は約 280m。植生の垂直分布では本来なら山地帯上部でブナ、ミズナラを中心とした夏緑広葉樹が生息するような標高だが、コース全体でシラビソ、オオシラビソ中心の亜高山性の針葉樹林が広がるのは環境の厳しさによる。

3-32　自然-4　川上岳　（185 点）

川上と書いてカオレと読むのはまず難しい。飛騨では沢上をソウレという読みかたがある。川上岳は位山、船山とともに「位山三山」のひとつに呼ばれる。川上岳は三山の中でアクセスがしにくい点を除けば、飛騨一帯を一望できる素晴らしい眺望が待っている。サラサドウダンの咲く 6 月や、それらが山頂部で紅葉する秋の登山には多くのハイカーで賑わう。位山との縦走路は、「天空の遊歩道」と呼ばれトレイルラン大会が行われている。

3-33　自然-5　丸黒山　（375 点）

国立乗鞍青少年交流の家から丸黒山まで 2 時間 20 分（健脚の人）で登ることができる。ゆっくり登ると 3 時間近くかかり、アップダウンがかなりきつい。途中、日影平山の東側・岩井谷乗越を通り、枯松平休憩所を通過する。そこから 20 分ほど進むと「ガンバル坂」の急坂があり、さらに「根性坂」と続く。登山口ポストから 2 時間 20 分でようやく尾根に着き、あとは山頂まで 20 分ほどである。

丸黒山からは千町ヶ原に行くことができるがヤブコギで道は通りにくいという。

3-34　自然-6　福地山　（294 点）

福地山は奥飛騨温泉郷福地温泉街から約 2 時間半で登れる里山である。福地山は化石の山でもある。層孔虫などの化石を道端で見ることができる。4 億年の歴史をもつ地層からは、アンモナイトが発掘されておりこの地が太古には海があったことを物語っている。

地元温泉街の住民の細やかな整備のおかげで道は大変歩きやすく、子供でも登りやすい。山頂からの眺望は北アルプスが一望できる奥飛騨隋一の展望地となっており、紅葉が色づく時期や、残雪や雪の時期にかんじきを履いて登る県外からの登山客も多い。

3-35　自然-7　高屹山　（533 点）

久々野の河川敷公園駐車場から林道を車で行くと、林道終点に 6～7 台の駐車スペースがある。登山道には、大きな右折れ岩、ゴジラの背、位山三山を一望できるお立ち岩などがある。木々に覆われた最後の急峻な道を登り詰めるとふれあい広場があり、一気に視野が広がる。山頂はここからほんの少し下って登った所。下山道は別ルートで、最初は急だが、後は安全で歩きやすい。

3-36　自然-8　猪臥山　（130 点）

高山市清見町池本と飛騨市古川町畦畑にまたがる。

呼び名は、「いのぶせ」、「いのふせ」、「いぶせ」、「いぶし」と 4 つあり、昔、猪による被害などの関わりが、各集落ごとに深かったからと言う。国土地理院では「いのぶせ」、畦畑では「いぶし」と呼ばれる。

頂上のすぐ下の平地に「山の神」の社が祀られている。そこから数分で山頂に行ける。頂上からは 360 度の大展望が楽しめ、乗鞍岳、御嶽山と白山の秀峰、穂高岳などの飛騨山脈、北に望む飛越国境の山々が眺望できる。

3-37　城郭-1　三仏寺城　（252点）

三福寺集落の背後に位置し、北に向かって延びる城山（標高660m）の山頂に築かれた山城で、尾根に設けられた4ヵ所の平地が主要な遺構である。三福神社のかなり東方から登る道が大手で、尾根に出てから右に登りつめた奥の平地が本丸跡であろう。平安時代の末に築かれ、飛騨では最も古い城跡である。

3-38　城郭-2　尾崎城　（97点）

尾崎城へは、高山市立丹生川中学校の裏側から南方向に遊歩道で登る。上り口西側の御崎神社は地形上の尾根の先端にあたり、屋敷跡と推定される。

そこから100mほど東に登り詰めると二之丸といわれる郭に着き、さらに東へ進むと土橋を経て主郭に至る。

尾崎城は標高720mで、山頂の平坦部が広く、麓との比高が70mと低いことから屋形城といわれてきた。空堀を周囲にめぐらしその上部を土塁としている。

3-39　城郭-3　畑佐城　（426点）

畑佐城は新宮神社裏手の標高670mの山頂に立地し、上枝地区や、山田城を眺望できる見晴らしの良いところにある。地元では立壁城とも呼称される。

古くから文献などに記載が見られ、『飛州志』では「往古山田紀伊守其後川上縫殿介居之川上ハ天正十壬午年小島合戦ノ時戦死」、また『飛騨国中案内』では「是は城主三木氏城郭なれども其説山田紀伊守在城すと云う」とある。これらから戦国期に山田紀伊守、川上縫殿介が居城したと推測されるが、両者の詳細については明らかではない。

3-40　城郭-4　山下城　（44点）

山下城は、標高920mの尾根上に築かれている。主郭は、西側の尾根を2本の堀切で遮断している。主郭は平坦で、平たい石が並べられているが、城に関わる遺構ではなく、後世の遺構と思われる。

主郭より東に下ると尾根は二つに分かれている。東の尾根の曲輪は、周囲に低いながらも明瞭な土塁を設けており、隅部は櫓台状を呈している。東南の尾根の曲輪は、小規模な曲輪が下段にも続いている。山下城から麓に下る際は、尾根がいくつも分かれていて迷いやすい。

3-41　城郭-5　鍋山城　（216点）

鍋山の名称は、その山の形から起こった。城は三つの山にわたって構築され、大鍋山に主郭、小鍋山に二之郭、下鍋山に出郭があった。

＜大鍋山＞主郭　標高759mで、麓からの比高173m。
中央に「奉敬鍋山権現」と刻んだ石碑があり、ここが本丸とされる。東側と北側に石垣が現存する。

＜小鍋山＞二之郭　標高746m。

＜下鍋山＞出郭　標高720m。

3-42　城郭-6　向牧戸城　（47点）

寛正の初め、室町幕府第8代将軍足利義政の命を受けて内ヶ島上野介為氏が信濃国松代から白川郷に入って向牧戸城を築いた。白川郷はもとより川上郷、小鳥郷、さらには越中国砺波までを所領とする勢力の拠点とした。

3-43　城郭-7　高堂城　（131点）

『飛州志』に「廣瀬瓜巣村ニ在リ利仁將軍ノ後裔廣瀬左近將監利治築之子孫廣瀬山城守宗城兵庫頭宗直居之天正年中三木大和守自綱ニ戦ヒ負テ宗城終ニ討死ス其子宗直ハ城ヲ落テ行方ヲ知ラズト云フ自是三木持分トナル城地圖地理部ニ載ス」とある。

平坦な主郭があり、北側・東側・南側に小さい曲輪がいくつかある。

広瀬郷に土着した広瀬氏の居城と考えられている。

3-44　城郭-8　広瀬城　（146点）

広瀬城は、北飛騨における三木氏の重要な城であった。山林として長い間保存されてきたので遺構の残りがよい。

広瀬城はJR飛騨国府駅の南方約1kmにあって、山上にある規模の大きな山城である。

『飛州志』によると、「田中城旧称広瀬城」という。天文年間、広瀬左近将監利治によって築城されたといわれている。広瀬氏歴代の居城であったが、城代に広瀬氏の家臣田中与左衛門（田中筑前守）を置いたので田中城ともいわれている。

3-45　城郭-9　梨打城　（165 点）

『飛州志』には「同郷（荒城郡）八日町村ニアリ同郡諏訪ノ城主江馬常陸守輝盛持分」と簡単に述べている。飛騨北部の高原郷に本拠を置く江馬氏が、荒城郷を支配し始めたのは意外に古く、15 世紀末頃にはすでに支配していたと推定される。

延徳 3 年（1491）5 月、室町幕府は守護勢力によって侵害されている北野社領飛騨国荒城郷を、江馬氏に回復を命じたとされる。このような経緯を経て、戦国時代に入ると江馬氏単独支配の地域へと変化していくのである。

3-46　城郭-10　五味原城　（58 点）

「八日町の合戦」があった国府町八日町から荒城川を 12km ほどさかのぼった丹生川町折敷地五味原に、地元では通称「しろやま」と呼ばれる山がある。

急な山道を登り詰めると山頂には二重堀切、腰曲輪、主郭などがある。

必要最小限の防備しか持たないことから、短期間でつくられ、その直後に廃絶された可能性が高いと考えられている。荒城川上流部で峠の向こうの高原郷を防御する位置にあることから、江馬氏の築いたものであるとされている。

3-47　城郭-11　岩井城　（152 点）

岩井城は松洞山の西方の尾根端に築かれている。

天然の要害で、平坦部の総長は約 80m。主郭の標高は 868m で細長い尾根上にある。

北側、南側は自然の急斜面になっている。西と東に堀切があり、主郭の北面には腰曲輪がある。

また小規模のいくつかの曲輪が東西にある。

南北朝時代、楠和田氏の後裔と称した和田新右衛門尉正武の城と伝わる。

3-48　城郭-12　森ケ城　（159 点）

森ヶ城は、尾根の先端に位置し、尾根続きを 4 本の堀切で遮断している。

特に内側の堀切は幅 15m、深さ 8m と規模も大きく、連続堀切となっている。

主郭は、東西 30m、南北 20m の楕円形で、高い切岸を持つ。主郭の北西に二段の小規模な曲輪があり、その先にまた堀切がある。主郭より北東に下る尾根には小規模な曲輪が並ぶ。

3-49　城郭-13　笠根城、板殿城　（148点）

笠根城は標高 860m、板殿集落から続く尾根上にある。

主郭の平地は東西 14m、南北 20m ほどで、東からの尾根が行きやすく、西側は急斜面になっている。

主郭の東側には 2 本の堀切があり、東側の大堀切は非常に規模が大きい。西側の主郭側の堀切は「三日月堀」とも提唱されている。

主郭の北、東、南面には帯曲輪がめぐる。西、南方向には段郭がある。比高は 130m もあり、現在登坂道はない。

3-50　城郭-14　牛臥山城　（108点）

飛騨川と無数河川が合流する地点にあり、牛臥山の南端、中腹にある。

主郭の北側に 2 本の堀切があり、西側には小さい曲輪がある。

城郭の西側には「城下」姓の家がある。

治承 5 年（1181）、木曽義仲の飛騨攻めの際の最前線の城であった。

義仲は久々野町の切手城、片野町の石光山砦を落して最後に三福寺町の三仏寺城（平景綱の城）を落城させている。

3-51　城郭-15　高原諏訪城　（153点）

■高原諏訪城跡

頂上の削平地からは高原郷の多くの集落が一挙に眺望できる。

本丸跡には、「江馬侯城趾」の石碑が建っている。

■高原諏訪城上部機構（仮称）

高原諏訪城から北の尾根続きで、高原諏訪城より標高で 160m 高い。

主郭は、北に堅堀と堀切を設けている。

3-52　城郭-16　小島城　（105点）

小島城は、『飛州志』に「国司姉小路家代々居住ノ本城也」とあるように姉小路家の嫡流小島家の代々の居城である。姉小路家は、戦国時代に同じく地方へ土着し戦国大名化した伊勢国北畠氏、土佐国一条氏と共に三国司と並び称される家柄である。

岡村利平の記した『飛州志備考』によると、永仁 2 年（1294）には、姉小路家の使者が飛騨に下向したとの記録があることから、鎌倉時代には飛騨を領有していたようである。

3-53　城郭-17　古川城　（26 点）

古川城は、姉小路古川家の居城と伝わる。

古川家は基綱・済継・済俊と続くが済俊没後 13 年で南飛騨の三木氏が古川家の名跡を継承する。なお、この継承は朝廷より正式に認められたものであった。三木氏はその後江馬氏を八日町合戦で打ち破り飛騨を統一するが、羽柴秀吉の命を受け飛騨に侵攻した金森長近に敗れ、飛騨は金森氏の支配するところとなる。

『飛州志』には古来古川二郎、塩屋筑前守秋貞が在城したと記載される。

3-54　城郭-18　向小島城　（101 点）

向小島城は、古川盆地北端の越中西街道をおさえる位置に所在する。街道をはさんで小島城と相対する。築城年代、築城者ともに明らかではない。

『飛州志』では、「姉小路家族向何某居之」とある。

向小島城は小鷹利城と 2～3km しか離れておらず、小鷹利城同様、姉小路三家の向家（小鷹利家）の城であったと考えられている。

城の東側（古川盆地側）には、尾根を遮断する堀切とそれに伴う土塁が構築され、古川盆地側からの攻撃に備えている。

3-55　城郭-19　小鷹利城　（37 点）

小鷹利城は、別名を黒内城といい、『飛州志』によると、飛騨国司・姉小路氏の同族である小鷹利伊賀守の居城と伝えられる。姉小路 3 家（小島、古川、向）の向家（小鷹利家）に属する城とされる。

また、建武 2 年（1335）、飛騨国司姉小路宰相藤原頼鑑が黒内城を築いたが、後に小島城に移り、小鷹利城を家臣の黒内越中守に守らせたとも伝えられる。

小鷹利城はほとんど改変を受けておらず、残りがよい。本丸西側には十数本の畝状空堀群が設けられている。

3-56　城郭-20　萩原諏訪城　（137 点）

天正 13 年（1585）金森長近父子は三木氏を討って飛騨を平定し、高山に本城、古川に増島城、神岡に東町城、そしてこの萩原に諏訪城を築いた。

天正 14 年（1586）金森長近はこの地にあった諏訪神社を上村に移してその跡に新城を築いた。佐藤六左衛門秀方を城代として守らせたという。この城は元和の一国一城令によって廃されたが、金森旅館として名を変えて存続した。元禄水帳に「台やしき 27 間半、17 間旅舎舗 1 段 5 畝 6 歩」とある。

3-57　城郭-21　宮地城　（135点）

応永年中（1394～1427）、京極氏の代官三木正頼の城と伝わる、三木氏の益田郡における当初の本拠地であった。天正13年（1585）、三木氏滅亡まで乗政城とともに三木氏一族が城を守った。重頼、直頼の頃は国境を超えて東農との騒乱があって舞台峠の北方大威徳寺を拠点に木曾勢、東農勢を防いでいる。

宮地城は益田郡の南東側の備えの役割を果たしていた。主郭は東西30m、南北10m、西方に堀切がある。西側の低い平地は屋敷跡と推定されている。

3-58　養源院　（313点）

豊臣秀吉の側室 淀殿が父 浅井長政の追善の為、長政の二十一回忌に建立される開山は長政の従弟で比叡山の高僧であった成伯法印、長政の院号を以って寺号としたのは文禄3年5月（1594年）である。

養源院の寺院名は浅井長政公の戒名そのものである。その後程なくして火災にあい焼失するも、元和7年（1621年）に淀殿の妹で二代将軍徳川秀忠公正室、お江により伏見城の遺構を用いて再建される。以来、徳川家の菩提所となり歴代将軍の位牌をまつる寺院となる。

3-59　京都国立博物館　（26点）

文化財保護法に規定する有形文化財を収集し、保管して皆様にご覧いただき、あわせてこれに関連する調査研究及び事業を行うことにより、貴重な国民的財産である文化財の保存及び活用を図ることを目的としています。

3-60　八坂神社2　（269点）

八坂神社は、京都市東山区祇園町北側にある神社。二十二社（下八社）の一社。

旧社格は官幣大社で、現在は神社本庁の別表神社。

全国にある八坂神社や素戔嗚尊を祭神とする関連神社（約2,300社）の総本社であると主張している。

通称として祇園さんや八坂さんとも呼ばれる。祇園祭（祇園会）の胴元としても知られる。

平安京遷都（794）以前より鎮座する古社で、「祇園さん」と呼ばれ親しまれております。

3-61　祇園祭（前祭）　（263 点）

京都祇園祭は、京都市東山区の八坂神社（祇園社）の祭礼で、明治までは祇園御霊会と呼ばれた。貞観年間（9 世紀）より続く京都の夏の風物詩である。

祭行事は八坂神社が主催するものと、山鉾町が主催するものに大別される。

一般的には山鉾町が主催する行事が「祇園祭」と認識されることが多く、その中の山鉾行事だけが重要無形民俗文化財に指定されている。

3-62　祇園祭（月鉾）　（193 点）

鉾頭に新月型をつけているので、この名で呼ばれる。

真木のなかほどの「天王座」には月読尊を祀る。古い鉾頭と天王の持つ櫂には「元亀 4 年（1573）6 月吉日大鋸屋勘右衛門」の刻銘がある。また正徳 4 年（1714）の鉾頭もあるが昭和 56 年から田辺勇蔵氏寄進の 18 金製の鉾頭にかえている。屋根裏の金地彩色草花図は天明 4 年（1784）円山応挙（1733～95）の筆。天井の金地著彩源氏五十四帖扇面散図は天保 6 年（1835）に町内の住人岩城九右衛門の筆。

3-63　祇園祭（鯉山）　（131 点）

山の上に大きな鯉が跳躍しており、龍門の滝をのぼる鯉の奔放な勇姿をあらわしている。前面に朱塗鳥居をたて山の奥には朱塗の小祠を安置し素盞嗚尊を祀る。その脇から下がる白麻緒は滝に見立てられ、欄縁その他の金具はすべて波濤文様に統一されている。山を飾る前懸、胴懸（2 枚）、水引（2 枚）、見送は 16 世紀にベルギー・ブラッセルで製作された 1 枚の毛綴を裁断して用いたもので、重要文化財に指定されている。

3-64　祇園祭（八幡山）　（84 点）

町内に祀られている八幡宮を山の上に勧請したもので、常には町会所の庭にお宮を祀っている。山の上の小祠は総金箔の美麗なもので天明年間（1781～1788）の製作といわれる。水引は今までの金地花鳥仙園図唐繍にかわって昭和 61 年より十長生図の刺繍が用いられている。「十長生」とは不老長寿を意味する。前懸は慶寿群仙図で元禄 3 年（1690）に寄進されたものを昭和 62 年に復元新調したのである。見送は日輪双鳳人物文様の綴錦と藍地雲龍文様蝦夷錦がある。

3-65　祇園祭（後祭）　（369 点）

祭行事は八坂神社が主催するものと、山鉾町が主催するものに大別される。

一般的には山鉾町が主催する行事が「祇園祭」と認識されることが多く、その中の山鉾行事だけが重要無形民俗文化財に指定されている。山鉾町が主催する諸行事の中でもハイライトとなる山鉾行事は、山鉾が設置される時期により前祭と後祭の 2 つに分けられる。山鉾行事は「宵山」、「山鉾巡行」が著名である。

3-66　建仁寺　（160 点）

建仁寺は建仁 2 年（1202 年）将軍源頼家が寺域を寄進し栄西禅師を開山として宋国百丈山を模して建立されました。元号を寺号とし、山号を東山と称します。

明治に入り政府の宗教政策等により臨済宗建仁寺派としての分派独立、建仁寺はその大本山となります。

また廃仏毀釈、神仏分離の法難により塔頭の統廃合が行われ、余った土地を政府に上納、境内が半分近く縮小され現在にいたります。

3-67　古い町並（三町伝統的建造物群保存地区）　（521 点）

高山は、金森氏により商業経済を重視した城下町として形成され、城を取り囲む高台を武家屋敷、1 段低いところを町人の町とした。この町人町の 1 部が現在の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）である。

町人地は武家地の 1.2 倍と広く、全国の城下町の平均が武家地 7 割、町人地 3 割であることから考えても町人地の広さに特色がある。商人の経済力を重視した金森長近の姿勢が現れている。

3-68　山中和紙　（6 点）

昔、飛騨紙の産地の中で、最も山奥で生産されていたことから山中和紙の名が付いたと言われています。

3-69　春の高山祭「山王祭」　（580 点）

6 世紀後半から 17 世紀が起源とされる高山祭。高山祭とは春の「山王祭」と秋の「八幡祭」、2 つの祭をさす総称で、高山の人々によって大切に守り継がれてきました。

このうち、高山に春の訪れを告げる「山王祭」は、旧高山城下町南半分の氏神様である日枝神社（山王様）の例祭です。毎年 4 月 14 日・15 日、祭の舞台となる安川通りの南側・上町には、「山王祭」の屋台組の宝である屋台 12 台が登場。

3-70　秋の高山祭「八幡祭」　（212 点）

秋の高山祭では動く陽明門とも称される「祭屋台」が 11 台曳き揃えられ、その豪華絢爛な姿を披露してくれます。

また、闘鶏楽や裃姿の警固など伝統の衣装を身にまとった総勢数百名におよぶ祭行列が、お囃子や雅楽、獅子舞に先導され祭地域をまわります。

夜になると各屋台はそれぞれ約 100 個にもおよぶ提灯を灯し、艶やかに夜の闇を飾ります。飛騨人の意気が高まる高山祭。高山の揺るぎない誇りです。

3-71　水無神社・臥龍桜　（22 点）

1100 年もの間、臥龍桜はいろいろな世の中の移り変わりを見てきました。

天正年間（1573 年～1592 年）には、この地を治めていた、三木國綱三澤が、金森長近との戦いに敗れ大桜の根元に葬られたと伝えられています。

今日も根元に五輪塔が、柵の外右側に三木家の祖霊社が祀られています。また毎年秋には、飛騨一宮水無神社の神主さんと大幢寺の和尚さん、三木家縁の人たちが 30 人ほど集まり、「三木祭り」といって祖先を供養しています。

3-72　飛騨民俗村（飛騨の里）　（160 点）

飛騨民俗村は、岐阜県高山市にある博物館（野外博物館）。飛騨の伝統産業（一位一刀彫、飛騨春慶塗、草木染めなど）の伝承保存、飛騨地方の民具の展示、合掌造りなどの飛騨地方の民家の移築保存がされている。

昭和 30 年代、御母衣ダムにより水没する合掌造り民家の矢篦原家住宅が横浜市の三渓園に移築されるなど、次々と貴重な民家が移築されていくことに対し、地元で保存していく考えで開業した施設である。

3-73　中部国際空港にデジタルサイネージを設置　（66 点）

知識基盤社会においては、様々な正確で良質な知識の集合体の整備が重要であるが、知識循環型社会の実現においては、様々な知的資料を集積した知識の集合体をどのように利活用するかが重要になる。また、様々な利用者が活用するためには結果よりも作業のプロセス情報が必要となる。意思決定結果より、意思決定のプロセスのほうが必要となる。即ち、知識循環型社会おいては結果のアーカイブよりプロセスのアーカイブが必要となる。

3-74　稲爪神社　（178 点）

兵庫県明石市大蔵本町に鎮座する神社です。式内社「宇留神社」および「伊和都比賣神社」を当社に比定する説があります。

3-75　出雲大社 2　（141 点）

出雲大社は、島根県出雲市大社町杵築東にある神社。
祭神は大国主大神。式内社（名神大）、出雲国一宮で旧社格は官幣大社。神社本庁の別表神社。宗教法人出雲大社教の宗祠。二拝四拍手一拝の作法で拝礼する。
明治維新に伴う近代社格制度下において唯一「大社」を名乗る神社であった。
八足門は、南の瑞垣の正面中央に位置、御本殿に参進する入り口で、寛文 7 年（1667）の造営。この八足門には左甚五郎の作と伝えられる、瑞獣と流水文など美しい彫刻が施されています。

3-76　泉福寺　（449 点）

泉福寺は、埼玉県桶川市にある天台宗の寺院である。山号は東叡山。院号は勅願院。房号は円頓房。本尊は阿弥陀如来および地蔵菩薩。

3-77　聖福寺　（393点）

旧日光街道沿いに今も残る聖福寺は菩提山東皐院と号し、浄土宗知恩院の末寺として応永年間（1394～1428年）に開山したと伝えられています。

江戸時代には将軍の日光社参の折りと、東照宮例大祭に天皇の代理で参拝した例幣使の帰路の休憩所に用いられ、山門は唐破風四脚門で将軍と例幣使以外は通行できなかったとされています。

阿弥陀如来を本尊とし、運慶の作と伝えられる観音菩薩像が祀られ、境内には漢学者金子竹香の碑などが建てられています。

3-78　歓喜院　（871点）

歓喜院は、埼玉県熊谷市妻沼にある高野山真言宗の仏教寺院である。日本三大聖天の一つとされる。一般的には山号に地名を冠した「妻沼聖天山」と呼称され、公式でも主にその名で案内される。また、「埼玉日光」（国宝に指定される前は「埼玉の小日光」）とも称されている。参拝客や地元住民からは「（妻沼の）聖天様」などと呼ばれている。

3-79　慈光寺　（148点）

慈光寺は、埼玉県比企郡ときがわ町にある天台宗の寺院である。山号は都幾山。院号は一乗法華院。本尊は千手観音で、坂東三十三観音第9番札所。

3-80　淨照寺　（481点）

ケヤキ彫りの欄間は左甚五郎（江戸時代の有名な彫刻職人）作との事です。

浅利町遅能戸のある浄照寺は鎌倉時代の建治元年（1275年）宗祖親鸞聖人の直弟子で関東六老僧の一人といわれた了海上人によって建立されました。

江戸時代（寛保3年）14世住職教応上人の時、寺基を現在の地である奥山遅能戸に移転しました。

本堂、庫裡等は全て当時のままの姿で残っている大変歴史深いお寺です。

3-81　冨士社社殿　（145点）

富士社は、元々は日枝神社の本殿として1748年（寛延元年）10月に飛騨の名工と誉れ高かった松田太右衛門以治が棟梁となって建立されました。屋根は、流造りに千鳥破風と軒唐破風を取り入れた構造となっています。1935年（昭和10年）の豪雨で裏山が崩れ、倒壊しましたがその後修理され、現在の場所に移築され、富士社となりました。なお現在の日枝神社の本殿は、1938年（昭和13年）に再建されたものです。富士社は平成7年の補修が行われ、極彩色の美しい姿になっています。

3-82　了徳寺　（161点）

了徳寺の鐘楼は真宗寺院としては異彩ともいえる四神による四方守護の欄間彫刻を施しているが、これは了徳寺開山・了専和尚が栗原神社の社人であった関係といわれている。

1448年栗原神社の社人・栗原衛門が本願寺存如上人に帰依し、了専となって開創したのが了徳寺である。

3-83　飛騨の匠ミュージアム（415点）

飛騨世界生活文化センター内にある、飛騨高山地域の家具作りを中心とした生活文化用品を展示する博物館。

飛騨の匠の歴史は飛鳥時代から、年貢の代わりに宮殿や仏閣の造営に携わったところに始まる。

千数百年前その時代の帝が用いた家具を復刻した展示は、「飛騨の匠」の木づくり文化とその技が、今の建築や祭の屋台に受け継がれていることを示している。

3-84　吉島家住宅　（107点）

四代目水間相模に師事した西田伊三郎によって、明治40（1907）年に建てられた町家建築です。

土間の吹抜けの梁は、木の美しさが際立つように高い技術によって加工され、大黒柱を中心に、束と梁の整然とした構成が目を引きます。高窓からの光線を巧みに取り入れて、屋内の柱や鏡戸の木目を引き立たせています。伝統に基づいており、全体的に簡素な美しさが持ち味です。

3-85　日下部家住宅　（297 点）

飛騨の大工の名門、谷口家の谷口延恭に師事した川尻治助による町家建築です。川尻治助は彫刻の名手でもあり、一刀彫の名品も残しています。

明治 12（1879）年に建てられた日下部家住宅では、これまで社寺建築に使われていた軒裏の「セガイ」（軒先で出桁を腕木で支え、天井板を張った構造）を民家に取り入れるなど、高山の近代民家建築を切り開きました。いかにも雪国の民家らしく、低く深く重々しい軒や、どっしりとした構えの中に美しい出格子が印象的です。

3-86　鶴岡八幡宮 2　（73 点）

鶴岡八幡宮は、神奈川県鎌倉市雪ノ下にある神社。旧社格は国幣中社で、現在は神社本庁の別表神社。別称として鎌倉八幡宮とも呼ばれる。武家源氏、鎌倉武士の守護神。鎌倉初代将軍源頼朝ゆかりの神社として全国の八幡社の中では関東方面で知名度が高い。境内は国の史跡に指定されている。

3-87　上行寺　（88 点）

上行寺は、1313 年（正和 2 年）、日蓮の弟子の日範の創建。

本堂は、1886 年（明治 19 年）に妙法寺の法華堂を移築したもので、格天井の絵は、細川氏の絵師によるもの。

本堂表欄間には「龍の彫り物」が施されており、山門には左甚五郎作とされる「龍の彫刻」も見られる。

3-88　古四王神社　（279 点）

古四王神社は祭神として大彦命を祀り、由緒によると、崇神天皇が四道将軍を日本全域に派遣し、高志国（北陸）へ赴いた大彦命がこの地の大石に休憩し、村人がそれを畏敬して祠を奉ったと言われています。コシオウという神社は、中部以北の日本海側に多く見られ、多くの社殿が北を向いています（社殿は一般には南向き）。

3-89　瑞巌寺２　（227 点）

瑞巌寺は、宮城県宮城郡松島町にある臨済宗妙心寺派の仏教寺院である。

日本三景の一つ、松島にあり、山号を含めた詳名は松島青龍山瑞巌円福禅寺。

平安時代の創建で、宗派と寺号は天台宗延福寺、臨済宗建長寺派円福寺、現在の臨済宗妙心寺派瑞巌寺と変遷した。古くは松島寺とも通称された。

江戸時代前期の 1689 年に俳人松尾芭蕉が参詣したことにちなみ、毎年 11 月第 2 日曜日には芭蕉祭が行われる。

3-90　大崎八幡宮　（210 点）

大崎八幡宮は、宮城県仙台市青葉区八幡にある神社である。旧社格は村社。社殿（本殿・石の間・拝殿）は国宝に指定されており、どんと祭の裸参りで知られる。

創建年代は不明であるが、社伝では坂上田村麻呂が宇佐神宮を鎮守府胆沢城（現岩手県奥州市水沢）に勧請し鎮守府八幡宮と称したことに始まり、室町時代に入り奥州管領であった大崎氏が自領地内（現宮城県大崎市田尻町）に遷したため、大崎八幡宮と呼ばれるようになったという。

3-91　三十三間堂官衙遺跡　（44 点）

三十三間堂官衙遺跡は、阿武隈川下流南岸の丘陵上に位置する、平安時代の亘理郡家跡と推定される遺跡である。昭和 61 年度から 63 年度にかけての亘理町教育委員会及び宮城県教育委員会の 4 次にわたる発掘調査によって、遺跡の性格、範囲、主要遺構とその変遷が明らかになった。

3-92　田沢磨崖仏（岩地蔵）　（85 点）

田沢磨崖仏（岩地蔵）は案内板によると「前方の阿武隈川に突出した岩塊に刻まれた磨崖仏群を田沢磨崖仏あるいは岩地蔵とよんでいる。

この付近には古墳時代末期の横穴墓群があり、後にこれからの横穴墓の幾つかを利用してこの磨崖仏が刻まれたものと思われる。

磨崖仏は鎌倉時代初めのものと思われ、四窟からなり、四体の地蔵尊と三枚の板碑が刻まれている。この場所は古来、稲葉の渡したいわれた所で、阿武隈川を渡る重要な地点であった。

3-93　野麦峠　政井みね氏　（4点）

政井みねは、日本の労働者。日本近代化を陰で支えた労働者の一人であり、かつて野麦峠を越えた女工を語る際に欠かせない人物である。岐阜県吉城郡河合村（現飛騨市河合町角川）の農村部に生まれた。当時はまだ貧しい農村部では、自らが出稼ぎに出る事で実家の食費を浮かし、家計を助けるという「口べらし」が一般に行われており、みねも家計を助けるために信州の岡谷へ出稼た。

3-94　高山市街地　（588点）

高山市は、岐阜県の北部（飛騨地方）に位置する市。全国の市町村で、最も面積が広い。

旧高山市時代から飛騨の中心都市であり、平成の市町村合併の一環として 2005 年に近隣 9 町村と合併。新しい高山市は面積 2177.61km² と、大阪府や香川県よりも大きく、東京都全体にもほぼ匹敵し、日本で最も広い市となった。

3-95　旧青山別邸　（197点）

青山家は明治・大正を通じ、にしん漁で巨万の富を築き上げました。その三代目、政恵が十七歳の時、山形県酒田市にある本間邸に魅せられ大正六年から六年半余りの歳月をかけ建てた別荘が旧青山別邸です。

旧青山別邸は平成 22 年、国より登録有形文化財に指定されました。

約 1500 坪の敷地内に木造 2 階建てで建坪は 190 坪。家屋の中は 6 畳～15 畳の部屋が 18 室、それぞれに趣が異なり、金に糸目をつけず建てられた豪邸です。

3-96　讃岐東照宮 屋島神社　（132点）

慶安 4 年（1651 年）、初代高松藩主・松平頼重が、香川郡宮脇村の本門寿院境内に東照大権現（徳川家康）の神廟（東照宮）を建立したのが始まりの屋島神社。

山王権現としても尊崇され、文化 12 年（1815 年）、8 代高松藩主・松平頼儀が屋島南嶺の南麓に移しています。棟梁は左甚五郎の末裔、左利平忠能。